

ふるさと再見

第一部 猿橋物語

読売新聞（昭和57年4月から5月1日まで19回連載）

ふるさと再見

第一部・猿橋物語

先入りの遺産——。それは私たちの心を温かく包み、日々の暮らしを支える。コンピュータや原子力、遺伝子工学など、きはゆいばかりの最新の科学技術に比べて、それは一見、古ぼけ、地味で古ぼったい。だが、ワラビや蘆根のすまいが、冬温かく、夏涼しいように、永い歴史をくぐり抜けて来た遺産は、郷愁を誘うと同時に今も役立つ、等かまきりが多い。それなのに、この遺産が次第に姿を消して行く。時代といえはそれまでだが、それでいいのだろうか。いま架け替えが進む「猿橋」を手始めに考えたい。

富士山のおき水を集めた桂川が一変する。その昔、富士山からは、東北へ約三十キロ流れ、大月から流れ出たとされる溶岩が川を市内の厩子川、馬野（かすの）川と合流する。山あいの激流は、すでに大河となつて、ゆるやかに水かきを溜めて清く去る。たりの流れ、広い河原には山から運ばれてきた大小無数の石が転がっている。

と聞かなく、この桂川の橋は、猿橋はここにあり。

大黒屋旅館

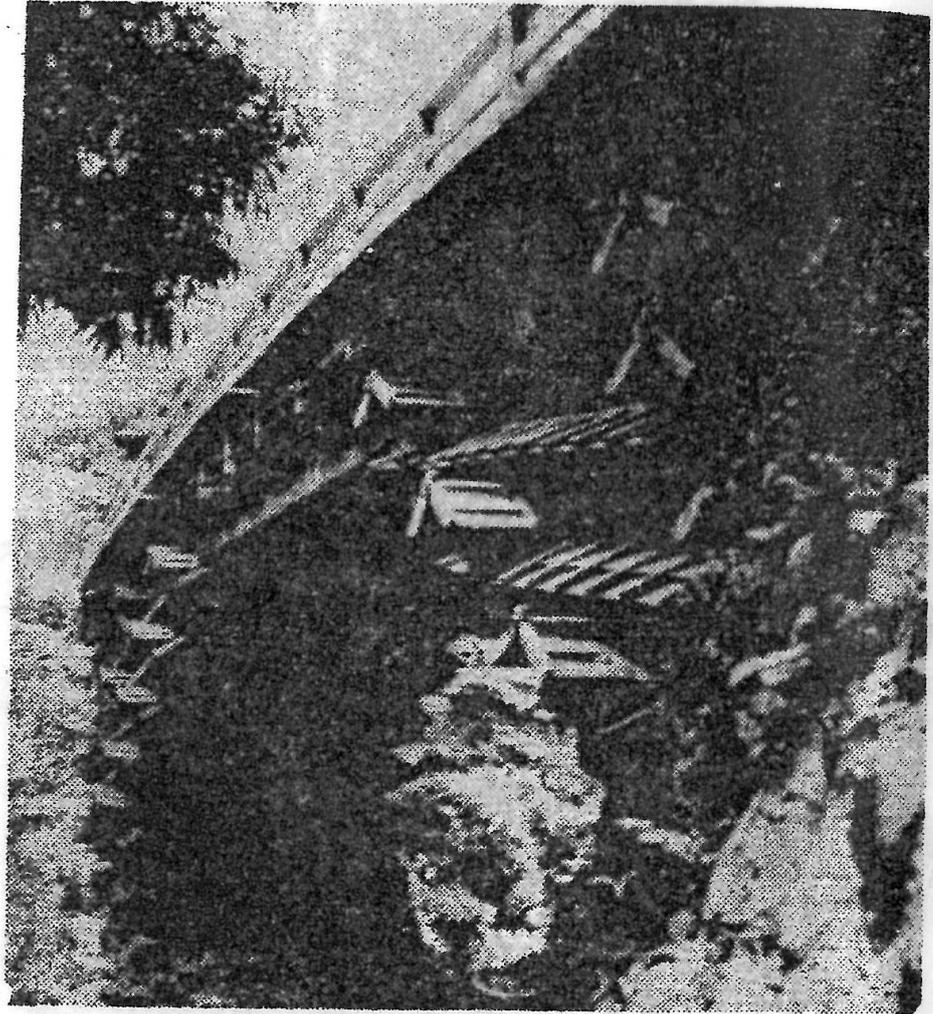
長さ十七間（約三十び）、幅十八尺（約五・五び）の木橋。深い溪谷には一本の橋脚もなく両岸に埋め込んだ数本の巨木の上に乗っている。日本三奇橋の一つとされるゆえんである。

橋の南詰めに一軒の茶店がある。看板は「大黒屋旅館」。経営は何人が代わったが、江戸から三百年のノレンは残っている。

当主は佐藤栄子さん、明治最後の生まれで七十歳。一大黒屋のおぼあちゃん一で通る。都留の農家から嫁いで五十年。猿橋の朝夕、四季を果敢とってきた。

その猿橋も、三十年ぶりの架け替え工事のため、一月に解体撤去され、今はその姿がない。ホッカリと穴の開いたような気持ちといいたく、おぼあちゃんに話を聞いた。

「雪の朝、桜の新緑のころ、いつ見てもここ。さげすみ、橋の上



ありし日の瑞橋(55年夏撮影、大月市教委提供)

三百年続いたしにせ

から暇の軒業が、ちよひは「しにせ」の
 善いなるは「しにせ」の
 「しにせ」の名物は手打ちの「忠治そば」
 命題の果はは「忠治そば」の
 た。その軒業が多て、太い。田
 各軒の由来は、こ存に固定
 海。きる時、代官所破りの忠治
 がしはらへ大黒屋に投箱、身を
 隠していた。やがて役人に見つ
 かったが、瑞橋から桂川に飛び

名物は手打ちの「忠治そば」

込み、上流の阿彌陀寺(現存せず)にいた子分の遺族、板割の浅太郎と暮ら合ひ、逃げのびたこのエピソードが残っている。事実、大黒屋には忠治が置かれていたといわれる裏切りの弁当箱、きせりなどがある。

「の忠治そば、瑞橋ととも」
 喧(けん)伝され、甲州街道を往来する人々に愛された。戦後も三十年代あたりまでは、富士方面に向かう観光バスが立ち寄り、結構な繁盛だった。が、四十四年春、中央道が河口湖まで開通、甲州街道が裏通り化するとも客足が落ち始めた。

川の対岸には「小松屋」「坂下屋」などの旅館、茶店があったが、相次いで廃業。三百年の大黒屋も例外ではなかった。やむなく旅館業の方を手控え、忠治そばを持ってその中央道に殴り込みをかけた。

いま、相模原・大月間の藤野パーキングエリア(上野二か所)に忠治そばのノレンがかかっている。コソのある山菜そばなどは出せないが、一日きりと十五両食。街道の旅人ならぬハイウェイのドライブパーたちにも、忠治そばはなかなかの人気である。